# マルメ大学研修報告書

医学部保健学科看護学専攻　　澁谷和佳

## 1. 医療制度の違い

日本の医療制度は、社会保険制度という、医療や看護サービスにかかる価格や提供方式を統制する制度によって成り立っている。日本の国民は医療保険に加入することで、保険証をもらい、この保険証があればどこの都道府県に行っても医療機関で受診することができる。そして、国によって医療機関の指定はないので、どの医療機関を受診するかは個人で決めることができる。

一方、スウェーデンの医療制度では、個人はその人の属する地方自治体によって定められた医療機関に受診し、そこにいる医師がより専門的な治療が必要かどうかを判断し、ほかの医療機関へと移る。また、国民が医療機関で支払う料金は、20000円程度で、手術やリハビリを受けても追加の支払いは必要ない。18 歳以下の子どもは、手術や歯科の治療が無料で行われる。

スウェーデンでは、Child　Health　Care に重点が置かれている。これは、病気や死亡率や病弱な人の数を下げる目的で行われており、これによって病弱な子どもが減ることで親のストレスを減らすことができるとされている。

## 2. 看護教育の違い

日本の大学では、看護学は医学部に属し、4 年間大学で勉強をする。その中には、一般教養科目も含まれ専門科目と直接関係のないことも学ぶ必要がある。多くの場合臨床実習は 3 年生以上からである。大学での教育が終了し国家試験に合格すると臨床に出て働くことができる。

一方マルメ大学では、看護学は社会学部を基盤としている学部の中に所属しており、3 年間大学で勉強をする。社会学を基にしていることもあり、社会学関連の授業が多く見られる。日本とは違い大学入学後の 1 年間をほとんど専門教育以外の科目のために費やすことはなく、1 年生のときから専門科目を多く履修する。また、臨床実習も 1 年生のうちから行い、3 年間の学生生活のうち半分は臨床実習をするという。そして、最終学年時に行われる実習は自分の知識を広げるためにほかの国のクリニックに行くことが可能である。これは、母国以外の国に行って研修を受けることで自分の国のケアの良い点と悪い点を発見することができ、良い点はさらに伸ばして、悪い点については行った先の国からヒントを得ることでより自分の国のケアの充実をしようという考えに基づいているという。学部での教育が終了してもすぐに臨床に出ることはできず、大学院で研究などをしてからでないと臨床の場に立つことはできない。

日本の看護教育と最も違う点は、２つある。１つ目は KUA というチームワークを学ぶための研修である。これは、マルメ大学とルンド大学という大学が共同で行っている研修である。この研修は、将来、医師、看護師、理学療法士、作業療法士になる学生が１つのチームを作り、同じスケジュールで行う。また、全ての過程を Facilitator という専門家が第３者の目線で観察し、良いところや改善すべきところを助言してくれる。ここでは、様々な症状の患者を想定することができるハイテクな人型ロボットを使って訓練する。それぞれの症状に合わせて、どの専門職が患者のニーズに応えることができるか、各々が何をするかを話し合い、ケアプランを立て、実行したのち、良いところやどうすればもっとよくできたのかについての振り返りを行う。ここで行う症例は緊急時のことを行うため、専門外だからといって何もしなくて良いメンバーはいない。それぞれ何かできることを探してみんなで解決する。２つ目の違いは、看護だけでなくそのほかの職種につく学生も、同じ現場で働く他職種の人がどのような内容の仕事をするのかということについての知識があるということである。日本では KUA のような多職種合同の研修を行うことはない。それに加え、授業で他の専門職のする内容を詳しく学ぶという機会もない。そのため、他の医療従事者が何をするのかについては曖昧である。KUA では、互いに自分や相手のできることを知ることで、お互いを尊重し合うことができるようになる。このようにすることで、患者さんに最適なケアを提供できるのがいつも医師ではないと分かり、それぞれの職種の人々が自分のできることを積極的に行える環境を作ることができるという。それと同時に、医師を頂点とするヒエラルキーを脱却するという目的もある。

### 3. 現地の人々の考え方・価値観の違い

私が一番日本人と考え方が違うと感じたのは、強い力をもつものから弱い立場のものを守るという考え方である。例えば、KUA で医師を頂点とするヒエラルキーを脱却するための教育を行っていることや、Clinical Supervision という学生と先生が５～７人のグループを作り同じ立場に立って、実習中に経験した個々の学生の心の苦しみについて、その苦しみを軽減するためにはどうしたらよいかを話し合う機会があることがあげられる。弱者を救うためにはどうするかについて考える授業があるというのは、キリスト教に基づいているという。困っている人がいたら助けなければならないという感情自体は日本人も持っているはずである。しかしスウェーデンでは、その感情を個人のレベルにとどめるのではなく、みんなで考えて解決するというところまで進める。この使命感のようなものは日本人にはない考えだと思う。日本でもスウェーデンと同じ状況があるはずなのだが、それを解決するための機会は学校教育では行われていないようだ。他国と比べると、日本人には、自分がやらなければならないと率先して行動することが少ない。このような考え方を変え

ていく力を身につけなければ早期状況改善にはつながらないのだと分かった。

4. 全体を通しての感想

私がこの研修に参加しようと思った理由は、英語の授業が受けてみたかったというのと、外国に行ってみて、何か刺激を受けたかったというのがもともとであった。しかし、初めてマルメ大学に一緒に行くメンバーと事前学習内容の発表をしたとき、まわりの先輩の研修参加動機が「スウェーデンの福祉政策を学んで今後の日本に生かしたい」といったものだったので、とても驚いたし、自分は少しこの研修のことを間違って認識していたのかもしれないと思った。私のように「英語」に重点を置いている人がいなかったからだ。その事前学習以降、私は「英語」に重点を置きながら、医療制度の事にも関心を持って参加しなければならないのだと思い直した。実際にスウェーデンに行って、マルメ大学で授業を受けはじめると、再び自分とまわりの差を痛感した。それは何かというと、私は 1 年生であったため、看護の知識が大幅に不足しているということだった。研修ではよく「1 年生だからまだ知らないね。」と言われることが多かった。看護の知識があればもっと感じることがあったのかと思うと、まわりの先輩との吸収できる内容量に差があることを実感し悔しかった。しかし、スウェーデンにいるときは日本での事前学習発表会のときとは違い、このままではせっかくの機会が無駄になるという思いが強かった。そのおかげで、先輩たちが、日本にあったらもっと自分の実習がよりよくなったなどの言葉を注意して聞き、自分のこれからの実習の機会に役立てようと考えられるようになった。このように考えられるようになり、英語の授業にも慣れてくると、大学での授業を楽しく受けることができた。

授業内容のほかに私がこの研修で学んだことは、英語を話すことの難しさと看護学を大学で学ぶことの意義である。私は今まで、英語でのコミュニケーションをしたことがない。しかし、英語の文章を考えることはできる。だから、英語でコミュニケーションをとることは難しいことではないだろうと思っていた。でも現実は違っていた。というのも、英文を考えることができても話すことはとても勇気のいることであったからだ。日本にいるときに友達に Hello とふざけて言うことがあったことが嘘のように外国の人にあいさつをするのに苦労した。授業中に質問するときは、さらに苦労した。しかし、外国に来て授業を受け、さらに質問をするという機会はそうたくさんあるわけではないと自分に言い聞かせて、質問することにチャレンジした。マルメ大学の先生に自分の考えが通じ、納得のできる答えが返ってきたときはとてもうれしかった。そして、マルメ大学で看護の授業を受けていて、大学で看護学を学ぶとはどういう意味があるのかを自分なりに考えた。今回の研修では、スウェーデンの大学生と直接会って話をする機会はなかったが、大学の教育方法についての授業が多くあったのでそこから私は次のように考えた。大学で看護学を学ぶ

とは、看護を実践するための知識を学ぶだけではなく、看護に関わるバックグラウンドを知ることで自分の持つ知識を自分の経験したことのない状況下でも応用できる力を養うことであると思う。マルメ大学での授業の多くに、スウェーデンの歴史的背景について触れることがあった。はじめは、なぜ歴史的背景の話をするのか分からなかった。しかし、歴史的背景の説明の後にどういう政策ができたかを説明したり、その後に起きた現象を説明されたりしたとき、母国のことではないのに容易に理解することができた。このことをはじめとして、バックグラウンドの知識があるのとないのとでは、物事の理解のしやすさに違いが出るのだということに気が付いた。これにより私は大学で看護学を学ぶことにはこのような利点があるのだということを知ることができた。

私にとっては初めての海外で、日本とは違う生活環境に自分は対応できるのか、とても心配だった。スウェーデンに行ったはいいが何もできずに終わってしまったらどうしようかとも思った。しかし、まわりの先輩方が一生懸命質問したり、話しかけたりしているのを見て、私も恥ずかしがっていてはだめだと自分を奮い立たせることができた。海外に行くこともよい刺激ではあったし、それと同じくらいまわりの人から刺激を受けることも多かった研修であったと思う。良いメンバーに恵まれたことと良い機会を与えてくださったことにとても感謝している。この経験を無駄にしないために、スウェーデンで過ごした 7 日間とその時感じたことを思い出し、モチベーションを高く維持できるようにこれからの学校生活を励んでいきたいと思う。